# オジサマ王と幼な妻

ティシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オジサマ王と幼な妻

【Ｎコード】
Ｎ８３５８Ｏ

【作者名】
ティシー

【あらすじ】
一ヶ月前、遂に少女はアクルム王国の王妃となった。
王宮の人々は暖かく見守り、第一王子アーザーは若干疲れながらも近くで見守る。

４３歳のオジサマ王バルと１７歳の幼な妻メーナのノロケ話。
※連載小説名で作った「ファンタジー短編集」へ、この小説を含む全短編小説を移動しました。

**（前書き）**

まさかの第三弾！ちょっと短いです…。
今回は前作を読んでいないと少々分かりにくいかもしれません。

――――その日、アクルム国王バルケルトと第一王子アッザフォースはそれぞれ書類に目を走らせていた。と、言っても一方は上の空であった…。

「ねぇアーザー」
「なんでしょう」
「ボクこの頃悩みがあるんだけど」

珍しい。この父に悩みとは。
隣国議会でも見たことがないくらい真剣な顔をしていたので、書類を書く手を止めて父に向き直る。

「俺が手伝えることなら協力しますが」
「本当かい？助かるよ」
「それで？」

「ああ…実はね、メーナとまだシていないんだ」

…。

「は？」
「キスは慣れてくれたみたいなんだけど…。

もう結婚して一ヶ月経つし、そろそろねぇ」

この人は何を言っているのだろうか。一国の王が、４３にもなったオッサンが何を情けないことを漏らしているのか。

「あなたって責めて責めて責めるタイプじゃなかったですか？」
「そうだね。でもメーナはダメなんだよねー」
「ヘタレですか」
「失礼だねぇ。そりゃ鳴き叫ぶメーナも見たいけどハジメテでソレはダメでしょ？」
「いやいやなんでそんな極端な考えにいくんですか」

普通に抱けよ。優しく。

「困ったねぇ…」

俺がな！

「メーナ様は嫌がっているんですか？」
「メーナじゃなくて母上だよアーザー」
「いいじゃないですか今更。もう奪う気も失せて、今は隣国のトゥイル王女がターゲットですし」
「トゥイル王女？あそこは王女と言っても確か歳が…」
「えぇ、俺より上です。２６でしたっけ？まぁあなた達には敵いませんよ。で？俺はともかくメーナ様はどうなんです？」
「単に恥ずかしいんだろうねぇ」
「なら問題ないでしょう」
「ボクもそう思うんだけどね」

王妃にする！と何が何でも押し切っていたあの時の覇気はどうし

た。

「メーナ様はあなたのことが好きなんでしょう？」

「そうなんだよアーザー！聞いてくれるかい」

なんだこの人。急に目が輝いたよ。

俺が肯定もしないまま話は進む。

「この前ね、初めてスキと言ってくれたんだ。キスで止めたボクってすごいよね。ディープだけど」

確かに。今までのこの人の言動を考えるとすごい、のか？

「でね、その時のメーナが可愛くてさあ……」

…その後延々と惚気話を聞かされる第一王子アッザフォース。

「（仕事をさせてくれ！そしてアンタも仕事しろよ！！）」

心の中の叫びは、決してバルケルトに届かない。

―――――――――

一ヶ月前、‘歳の差婚’‘電撃婚’‘格差婚’の３つを揃えて、アクルム国王バルケルトと結婚し、私はメーナ・アクルムとなりました。

「メーナってさ初々しいよね」
「うっ」
「好きって言ってくれたことも片手で数えれる程しかないし」
「ううっ」
「１７年間言ったことなかった？」
「あ、あったよ！…メールで、だけど」
「じゃあ直接言うのはボクが初めてだったの？」
「うん…」
「もしかしてキスも初めて？」
「ち、違うよっ！
ファーストキスは斉藤君だし、次がいっくんでその次がけーちゃんで次がバルだよ！！」
「…メーナ？それはボクを妬かせようとしているの？」
「は！？」
「それならボクも妬かせたいなあ。ボクは確かアギルネ…違うや、リリーシュ？いやカリミー？
あれ？それは初セックス？じゃあえーっとシェス？ううんフィニ

ン？それとも――」

その二人のやりとりを上から聞いていた第一王子アッザフォース。

「あの人達は昼間から庭で何という会話をしているんだ。

侍女や兵士も周りにいるというのに大声で…」

「もういいっ。バルなんて大ッ嫌い！！」

「えっ。ちょっとメーナ！」

「私はっ…私はバルだからこんなに緊張するのに！今までとは何か違って…特別だから！それなのにっっ…っバルなんか嫌い！！」

「メーナ……最初からそう言ってくれればいいのに」

「だってバルが！」

「メーナ、今日は初夜だね」

「はい！？」

父のニヤけた顔が目に入る。

「なんだ、結局また惚気か…」

疲れが増したアッザフォースだった。

―――――――――

チュンチュン…ピピ…

「ん…ん？」

……はっ！

「ヤっちゃった！？」
「残念ながらヤっちゃってないねぇ。ある意味ヤっちゃったけど」
「バル！？起きて…！」
「おはようメーナ」
「お、おはよバル」

「昨日こそはと思ってたんだけどね？
まさか先に寝てるとはねぇ」
「あぁぁ！ご、ごめんなさい！」

そうだ！お風呂から上がった後、ベッドが心地よ過ぎて！

「ボクは今からでもいいんだよ？」

声を低くしてそう言うと、バルは私を抱き寄せる。

「私はご遠慮したいです！」
「まぁ盛りたい年頃でもないからいいけどね。
だけどメーナに嫌われてるんじゃないかと不安になるんだ」
「そ、そんなことないよ！」
「そう？じゃあ言ってみて？」
「えぇ！？」
「好きって、ほら」
「い、今ですか？！」
「うん」
「……っ！～っ！！」
「無言の戦いをしないでくれるかい…。結構傷付くんだけどなぁ（ウソだけど）」
「わあぁ！ごめんバル！」
「昨日のお昼の勢いはどこに行ったの？」
「あれはっ！バルが…！！」
「ボクが何？」
「だって…、だってイヤだったんだもん！」
「何がイヤだったの？」
「バルが、他の女の人とキス、とかあの、セックスとか…」
「妬いたんだ？」
「うん…。ごめんなさい…」
「なんで謝るの？」
「その…鬱陶しいかなって…」
「メーナは可愛いね」
「いやいや今の話でどこが可愛いの」
「うん？ボクが好きで好きでしょうがないんだよね」
「そ、れは……。
…バルは？」
「ん？」

「バルは…？」
「何？言って欲しいの？」
極上の笑みを返されて赤くなった顔を隠すように、コクンと頷く。
「そうだね…一生離したくないくらい…ううん、片時も離れたくないくらい好きだな。
眠っている時間すらも惜しい。メーナはボクだけ見てればいいんだ…。
メーナも、ボクの気持ちの半分でいいから同じだと嬉しいんだけどね」
「……だよ」
「ん？聞こえないねぇ」
「好きっ！バルが好き！私だって好きな気持ちはバルに負けてないよ！！」
眠る時間は欲しいけど！！！
「ふふ、やっと言ってくれたねメーナ。
さあ、始めようか」
ニッコニコ笑顔のバル。
「え？」
「あれだけ連呼されればボクもそういう気になるよ」
「え、だってバルが…」

「大丈夫、自他共に認めてる――ボクは巧い」
「いやあの…」

「メーナ、天国を見せてあげる」

誘うように射抜いてくる瞳。

「今日は一日、ボクと天国観光にイこう――」

その瞳につられて、頷いてしまったのは不可抗力だ。

**（後書き）**

勝手にイっとけって感じですよね↑
なんか…内容ってあった、のだろうか…？
こんなんですけど、読んでいただいてありがとうございました。感想いただけると嬉しいです＾＾

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8358o/

---

オジサマ王と幼な妻

2011年1月12日12時21分発行